

一部 私と浄土真宗との出遇い

こちらにご招待いただきまして、皆様とお会い出来る素晴らしい機会が持てましたことを有難く思っております。では私の自己紹介と、浄土真宗にご縁を得たいきさつについてお話させていただきます。

実際、私には今まで日本との何のつながりもありませんでした。東洋との結びつきもまったくありませんでしたし、関心もなかったのです。少なくともこの生涯において浄土真宗に出遇うまでは、宗教への関心さえありませんでした。

私は第二次世界大戦中に、ポーランドのカトリックの実業家の家庭に生まれました。私の家庭は共産主義者達によって全財産を没収されてしまったので、この新しい現実を受け入れていくことは両親にとつて、とても困難なことでした。両親は宗教に熱心ではなかったのですが、慣習通り私をカトリックの学校へ行かせました。私はききわけの良い子で、素直でしたが、八才の時神父の先生のおかしさと抗議するようにになりました。もし神父さんが言われるように、神様がそれぞれの家にいる子どもの数を決めているなら、なぜあの子ども達はこんな悲惨な状況の中にいるのだろうか。神様が創造主で、私達が神の生産物であるなら、私達が不完全だということはどうして罰しようとするのだろうか。

このような疑問を抱きながらもキリスト教の大きな儀式に参加したあと、宗教教育を受け続けることを拒みました。両親は無理強いすることなく、別の無神論の学校に私を転校させました。それは一九五二年、私が十才の時でした。スターリン全盛の時代です。政府は国民をキリスト教の影響から離れさせるように熱心に説得していました。

一方、国民は共産主義の統治に逆らってキリスト教を擁護していました。政府はとりわけ「新しい体制」を積極的に擁護する国民を育てようと、無宗教で無料、無試験ではあるけれど、とりわけレベルの高い教育を施す学校を、いくつか作ろうとしていました。共産主義に協力する変り者の親がそういう学校に子ども達を送ったものですが、その子ども達は将来重要な地位を引き継ぐことが保障されていました。

私とその学校に移る前に母は私に話しました。「あなたはいつもいっばい難しい質問をするけれど、私は答えてあげることができない。たぶん新しい学校では答えてくれるでしょう。」と。そして母は結論を出したのです。それから宗教について私にもう一度尋ねました。「私は信じていない教えに従うことは出来ません。」と正直に答えました。ふりかえって見ると、この学校は私の職業上の経歴を得るために非常に役立ちました。私は素晴らしい教育を受け、自然に「ふさわしい人脈」を作りました。

私が十四才のとき、一人の尊敬できる女の先生がなぜこの学校に来るようになったのかと私に尋ねました。「私はただ神を信じていないからです。」と簡単に答えました。「なぜ信じていないのですか。」と彼女は聞きました。「それは神が存在していないからです。」と私ははつきり言いました。彼女は長いことじっと私を見ていましたがそっとささやきま

した。「誰にもそのことを言わないように。あなたは正直そうだし、人々があなたの言うことを信じるかもしれないから。人々には生きるために神が必要なのです。とりわけ最近のわが国においては。だから誰にもそれを言わないと約束してください。」と、こういうことがあって私は宗教について考えることさえ止めてしまいました。

医学部二年生の二十才の時、乱暴な運転の車にひかれて重傷を負いました。ひかれた瞬間のことは覚えていないのですが、事故直後に目を覚まして、私は身体から離れて身体の上の方でさまよっていたのを覚えています。身体が道路に横たわり、その周りには車と私の身体を取り巻く人達が見えました。「あそこに自分の身体があるということは私は死んでいるんだ、自分自身と自分の身体が一緒だと考えていたとは、なんと馬鹿だったんだろ。」と私は思いました。私は恐くありませんでした。何も考えなくてそこに横たわっている自分の身体と、助けを呼んでいる人々を見ていました。一人の兵士が私のサイフを取り出して身分証明書を探しました。大きな音をたてて救急車がやってきました。身体が救急車に入れられてすぐに、私が自分の身体に戻ったのだとわかりました。そしてふたたび気を失ったのです。

それから三日間、死線をさまよい、三カ月後に病院を出しましたが、回復するのに一年かかり、その後勉強を続けるために故郷ワルシャワの医学部に戻りました。

自分の身体を離れたという体験は心の中ではつきりしていました。そしてこのことで私は生命維持と死にいたる過程を調べつつ、脳と神経組織学を専門に、研究しようと決心しました。専門外の勉強で、とくに関心があったのは哲学とヨーロッパ及びポーランドの歴史でした。哲学には落胆し、たえまなく同じ過ちを繰り返す歴史は、とても悲しく思えました。

友達と一緒にいるよりも勉強していることが好きだったので、一人で多くの時間を過ごしました。与えられた環境に対する感情的な接し方に、自分と周りの人達とは、違いがあります。私はいつも普通に何かをつかみ、出来るだけ多くの見方に分析することを望みました。一般的に、人々は色々なことに関心を広げ、いつも物事に賛成か反対かを表わそうとします。たとえば共産主義体制は人々に有益ではなかったけれど、彼らがしようとしていたことでもいい事もありました。私は積極的に政治にも社会にもかかわってこなかったのです。私の専門職としてのキャリアは一般的なやり方ではありませんでした。政治にも社会にも関心がなかったが故に、自分の仕事に専念出来、かえってキャリアが身についたと言う逆説的例外です。

私に才能があったからだと思われるかもしれませんが、そうかも知れませんが、ご存知のようにキャリアを身につけるには才能だけでは十分でないのです。成功をうまくもたらす能力が必要です。私の場合はキャリアに特別な関心を持たず、信頼ある専門家と認められ、独立した科学者の地位と認可が与えられたまれなケースです。

実をいうと、私はいつも人間の生命、とくに私自身の生命の意味を探していました。私はかなり頑固で正直なエゴイストです。そして生きる本当の目的を求めていました。なぜなら目的がわかれば生きる方法もわかるからです。私は世界を救いたいとか、国を良くしたいとか、貧しい人々を助けたいなどという大それたことを思っていたわけではありません。又何かを大成したいという大志を持っていたわけでもありません。私が出る事を何

かしたい、人生の意義を知りたいという気持ちでした。

二人子供がいましたが、結婚はうまくいかなかったので離婚しました。三十代後半になって、「私は何のために生きているのか、何が私を生かしているのか、生と死の違いはか。そのような根本的な問題の答えを必死で求めていましたが、まだその結論が得られないなかつたのです。

これらの質問はずっと心の中にありました。それはちやうど忘れてしまつて思い出すとが出来ない、どこかの町を探しているようでした。何か違ったことをしているという然とした気持ちでした。私の心の中に何かがかうまく置かれていないで、それを見失つて居るけれど、それが何なのかわからなかつたのです。

そしてある晩、何が何でもその答えを得たいという思いがおこつた時、絶好のチャンスがやってきました。私は何か間違つたことをしているのだと分かりました。しかし何が悪いのかわかりません。自分が限られた不幸な生きものに思えました。その瞬間、素らしい考えが浮かびました。「外に道があるに違いない。真実がきつとあるだろう。私限界をこえさせてくれるならかの力があるに違いない。」と。

そしてその力の名前も、それがどんなものかわからないままに、私はただこの力を学びました。その時は、仏教についてはまだ何も知りませんでした。哲学を勉強した時、リスト教を学ぶと同じようなやり方ですべての宗教を知りましたが、その力は「神とは」たたく違つたもの「であることがわかつていました。私は信仰ではなく智慧を求めていたのです。智慧がどんなものかわからずに智慧を呼びました。そうしてついに智慧が私ところに現われたのです。

それは想像でも、夢でも、幻想でもありません。実際ポーランドで私は、科学的な心持つ人間として知られていたと言つていいでしょう。あの時何か非常に大きなものにかい会いながら、つかまえることが出来なかつたのです。表現することの出来ないあるを感じました。名づけることが出来ないけれどその力を、感じていました。非常な感動少しも恐ろしみませんでした。はつきりと自分にわかる力を感じました。この力はわたを理解し、助けようとして居ると思つたので、何であろうとその力にに従おうと思つた。

最初私の身体は瞑想の時のような状態に置かれていました。その力が私を息づかせ、その息使いに私を従わせました。静かにその息使いに心を集中し、それから客観化された常に変つた自分を見つめ始めました。私が寝室の中にいて、私の周りにある部屋着との周りの品々が非常にはつきりと見ええました。まるで自分自身の映画を見ているようでした。私は意識を集中して、とてもドラマチックな自分の今の全体をながめていました。一度も自分自身が影響されやすくも、不注意でも、無知でもないと思つていました。自分が非常によく似ていると感じる人と一緒にいても、その人達と違つて居るように思つた。「宇宙の次元」と触れているのを感じていましたから。

六週間取れるだけの休暇を取つて、子供達を伯母に預けて、自分に与えられた教えを日見つめて居ました。子供達を家に連れ帰り、仕事に戻つたとき、私は別人になつて居ました。そして次第に予期しなかつた人々と出会い始めたのです。

私は信じやすいタイプの人間ではないし、自分自身のみならず誰をも、また何をも信じてはいませんでした。もしポーランドの人々がもつと批判的で、与えられた思想をあんなに信じていなかったら、ポーランドの国の歴史は違つたものになつていたでしょう。自分が宗教的な人間ではないとその時まで思つて居ました。ただ自分に与えられた智慧の経験に、とつても感銘を受けていただけです。ひたすらこの経験を思い、この智慧からもう二度と離れたくないと思つました。この智慧は、いつも私と一緒に居るけれど、私がそれに触れていると感じていないときは、離れているのと同じだと分かりました。たとえば、あなたが喉が乾いていても、目が見えなかつたり、水を知らなかつたら水を見つけることが出来ないし、すぐ水の近くにいてもその水が飲めません。私はこの智慧といつも一緒に居るように努めようと思つました。

最初セオソフイの国際精神学会と出会い、彼らから初めて仏教を学びました。しかし私がそれを選んだわけではありません。私を導いている力に従つたのです。私は精神的に発達することが保証されていると思つましたが、自分でも何か行(ぎょう)をして居るとか、瞑想しているとは思いませんでした。それは明らかに私にもたらされたものでした。私がその時経験したことすべては、私個人の可能性をこえるものでした。もう一つの生きる道と学ぶ道を見だし、それは力つよく、印象的で真実の味わいでした。捕らえそこねていたものにやつと近づきつたのです。

ある日、モスクワとの共同作業で医学部の代表としてロシア人の翻訳者が必要となりました。やつてきた翻訳者は最近ポーランド人と結婚したばかりの若いロシア人女性でした。仕事で二、三度会つたあと、彼女は恐縮しながらポーランド語で書かれたテキストを読む手助けをしてほしいと頼みました。彼女にとって、とても大切なものであるということでした。チベットのラマによつて書かれた人間の心に関するものでした。こうして私が仏教を勉強し始めたのは、十三年前のことでした。

私は読むものには非常に批判的なのですが、ロシア人翻訳者が持つてきた本はすべてとても楽しく読みました。それまで私は、いつも初めて参加した会合で、自分の居るところではないと感じていたのでポーランドのどの仏教のグループにも所属していませんでした。二、三年後、「南無阿弥陀仏」と称えながら阿弥陀仏について語る人に出会いました。すぐに「南無阿弥陀仏」が私を導いてきた「師」すなわち「力」の名前だと、はつきりとわかりました。喜びに満ちて昼も夜もその名前を称えました。二、三週間後ワルシャワ空港で浄土真宗の三人の僧侶の方に会いました。たまたま招待する予定だった人の家庭にごたごたがあり、私が空港の近くに住んでいて車があるので、空港で僧侶の方を迎えてホテルまで連れてきてくれるように頼まれたのです。

ヨーロッパ人僧侶一人と日本人僧侶二人が、集会を開くところをさがしていたので、私の家を提供しました。僧侶の人達は小さな仏壇を持つてきて居ました。こうして私は今生において初めて「光顔巍巍」を聞きました。

「光顔巍巍」の讚仏偈のお勤めは私の家のドアを開いたのです。私は長い長い旅のあとで我が家に帰つたように感じました。

その後日本から仏教書をいただき、二、三カ月後にはポーランド浄土真宗の代表となりました。ポーランドでだれか浄土真宗の教えを必要としている人がいるのかと思うかも知

れませんが、何度となくこの教えについて質問を受け、たくさんの方が念仏の行をしようと思いました。しかしそのほとんどの人達が別の伝統仏教に離れていったと言わねばなりません。

「なぜ」と私は自分自身にも尋ねました。その理由はむしろ簡単です。ポーランドには浄土真宗を学べる可能性は十分あります。しかし、教えを理解し評価することがまだできる状態ではないのです。具体的に言いますと、教義は理解するに難しいし、念仏の行はヨーロッパ人には一風変わったものに見えるために、ヨーロッパにおける浄土真宗は今のところ、選ばれた人々に対する教えとなっております。

ヨーロッパ人には、一般仏教でさえ理解することが難しいのです。過去千年ヨーロッパ人は、キリスト教の強い影響を受けてきました。大部分はキリスト教を捨てることへの潜在的な恐れと、生まれつき非常に強い差別心を持っています。伝承してきたものは信仰に基づいています。だから説得することは不可能です。

科学はカトリック教会や政治的影響と戦ってきた長い歴史があります。太陽系の中の惑星の位置を正すのに何世紀もかかりました。そして最近では遺伝との論争が続いています。中絶のことは問題として触れられてもおりません。

そのような境遇の中では、宗派を変える方法を探すよりも、あらゆる宗教的な問題はあきらめ、ほかのことをするほうがずっとやさしいのです。もし必要ならば、カトリックからキリスト教の他の宗派に移ることは出来ず、それも結婚のためにまれに移ることがあるくらいです。キリスト教でない宗教に変わるには、かなりの勇気と決心が要ります。そんな勇気のある人はそう多くありません。四千万のポーランド国民のうち仏教徒だと主張している人は十万人しかおりません。改宗して生活していくことはたやすいことではありませんから。

一般的に仏教の何が人々を引き付けるのでしょうか。「カルマ（業）の法則」によって、神という考えが置き換わることが心に非常な解放感をもたらすのです。「業の法則」は、物事はすべてが予知できない神によるのではなく自己の責任によることを教えているからです。次に悟りの中では、個々の我の人格が消え、真に仏としてすべてのものを抱き取る心と、差別から自由になる心がもたらされるのです。

仏教では人間に対して次のような言い方はしません。「私の命令に従って最善を尽くしなさい。もし理想的な人間になったら地獄から救いましょう。もしならなければ地獄に行きなさい。」私達の苦の原因には仏様はかかわっていません。全部自分の責任です。このことがキリスト教徒には新鮮なのです。

実際、苦が私達を教え導くと思われている神を信頼することは難しいことです。仏教は短い間に効果をもたらす特別な行があります。チベット仏教のマントラや瞑想は、ヨーロッパの新しいもの好きな人達に非常に評価されています。

しかしながら意欲的に、仏教の教えや、行を学ぼうとするヨーロッパ人にとってもその行は難しいです。どんな行であれ、ヨーロッパの伝統と文化の中では、どうしても矛盾を感じるのです。仏教は無我と無差別の関連性について教えています。仏教は感じることであり信じることではありません。仏教は人間や神が焦点でなく、十方の宇宙的な次元で考

えます。

人々が仏教の題目を称えているのをよく見かけますが、それは古いキリスト教の形を繰り返しているにすぎません。仏教徒には仏性を悟りに変えるための時間と行が必要です。多くの仏教徒は知ること、行じたり感じたりすることのギャップを感じています。

浄土真宗は入門者にとつて最も難しいです。あなたがたもご存じのように、浄土真宗と関わりのあるところに生れたということは、前世において仏法ときつとよい関係を持っていたはずで。

英語で浄土真宗を説明するにはいくつもの難しさがありません。アメリカ仏教では効果的であったことがヨーロッパではそれほど効果的でないでしょう。キリスト教の精神に基づき、キリスト教の用語法を使って翻訳がなされているからです。これでは浄土真宗から人々を離れさせてしまっています。ヨーロッパ人は盲目的な信仰や、献身、死後の約束された世界ではあきらまなく思っています。言語は非常に大切です。新しいことを伝えるのに使い古された、つまらない間違った用語法を使ったのでは正しく伝わりません。

アメリカとは状況が違っています。アメリカでは、日本人移民による日本浄土真宗の継続でした。浄土真宗を英語に置き換えるのをキリスト教徒が助けました。日本人はグループや社会の中での関係を大切にします。たぶんそのために「信心」を「フェイス（信仰）」と訳し仏教の信条や真理を「クレド」や「ゴスペル」というキリスト教の用語を使うことをあまり気にしなかったのです。

しかしヨーロッパ人はそうではありません。浄土真宗のお寺の、英語での日曜学校に参加した、小さな私の娘でさえこのように言いました。「お母さん、これはまったく仏教のお寺じゃないわ。あんな変なキリスト教の用語を使うなんて、もう外に出ましょ。」

ヨーロッパ人は仏教の本質を必要としているのです。オリジナルのそのままで、借り物の言葉ではなく、もとの精神の味わいがわかる教えを求めているのです。中国人がサンスクリットの言葉を中国語に置き換えるのには時間がかかりました。でも道教からの言葉は借りてはおりません。日本人は中国語を長く使ってきましたし、サンスクリット語や中国語の仏教用語も日本語の中にいくつが使っています。日本人が仏教を翻訳するのに神道の神主さんが手伝ったとは思えません。なのにどうして仏教の英語の編集にキリスト教の影響を受けなければならないのでしょうか。

こういう都合の悪いことが、浄土真宗が誤解され、間違っって受け取られてしまうのです。そして親鸞聖人によって述べられた、非常に深い究極の普遍的な仏教の性格を、広く西洋人が発見するのを難しくしているのです。では、浄土真宗の普遍的な性格についてこの会合の二部でのお話ししたいと思います。

合掌

「註」

平成五年三月九日名古屋別院で開催された「東海教区僧侶研修会」でなされた講話

原文英語 訳 岡崎市本宗寺坊主 都路初子